

第9回「鉄道の日」記念 フォトコンテスト

受賞作品 および
審査委員長のコメント



●記念フォトコンテストの審査を終えて

審査委員長 十文字義之

10月14日の「鉄道の日」を目途に、基幹輸送としての鉄道が多くの方々に対する認識と理解、更には親しみある鉄道の在り方をPRするため、全国の各運輸局において様々な取り組みを行っています。

国土交通省関東運輸局では、鉄道事業者で構成する「鉄道の日」関東実行委員会を組織し、PRの一環として管内における鉄道を被写体とする、「鉄道の日」記念フォトコンテストを毎年実施しています。本コンテストは、多くの方々が管内でとらえた鉄道をテーマとする写真作品を一般公募し、日夜欠かすことの出来ない鉄道輸送の親しみと認識、理解を得て頂くことはもとより、写真映像を通して新たな視点と鉄道輸送に対する再認識を得て頂くものです。その暁には、受賞作品の選考発表、表彰、公開するとともに、更なる鉄道に対する原点を見つめる一つの切っ掛けとなることを願っています。

本コンテストの審査においては、十文字義之(写真家・公益社団法人日本写真家協会会員)を審査委員長に、竹内健蔵(「鉄道の日」関東実行委員会会長・東京女子大学教授)、島由紀子(「鉄道の日」関東実行委員会委員長・京浜急行電鉄新しい価値共創室部長)、原健人(原鉄道模型博物館副館長)、三村伸弥(テレビ神奈川編成局編成部理事)、本江幸一(国土交通省関東運輸局鉄道部長)を審査委員に審査会を組織し、9月3日には419点の応募作品の中から事前の予備審査を行うとともに、9月9日に本審査を横浜第二合同庁舎会議室において職員立会いの下、公平且つ厳正なる審査を行ったことを先ずはご報告申し上げます。

審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、審査委員賞6点、フレート賞、テッピー賞(中学生以下)、テッピーナ賞(女性作家)各1点の計14点を選考し、以下の通り入賞者を決定致しました。最優秀賞に輝いたのは、南輝明さんの「復興への祈り」で、豪雨災害を受けた沿線の復興を願い、打ち上げたラン

タンが夜空に灯る幻想的な作品でした。その一つひとつの要素が審査委員一同、誰もが引き寄せられるパワーを兼ね備えた力作でした。

今回寄せられた様々な視点で寄せられた作品群は、419点(前回362点、前々回420点)で、応募点数は昨年から57点増、応募者数は160名(前回144名、前々回149名)と昨年から16名増加し、応募点数、応募者数共に昨年を上回る結果となりました。

一方、「フレート賞」は、暮らしと産業を支える貨物鉄道の力強さを表現し、旅客のそれに負けない表現力を備えています。また今回の「テッピー賞」では、低年齢層の優しい眼差しと観察力が垣間見える作品が寄せられ、上位入選された作品は、いずれも甲乙付け難いものがあり、南さんの作品は審査委員を根底から納得させる力作であったことは言うまでもありません。

今回の作品群を見ると、コロナウイルス感染症が5類に移行され、社会的規制の緩和など開かれた行動力が感じられ、応募作品の増加にも繋がる結果となりました。

鉄道フォトコンテストという観点では、基軸となる「輸送」「運ぶ」という概念を決して忘れてはなりません。分野を問わず輸送を見据えて行く中で、生活に欠かすことの出来ないモードである認識と理解が重要なのです。今後の撮影活動で旅客と貨物のモードに対し確かな目を十分養って頂き、持続継続した日々の撮影を通じて、自らの作品を創出して欲しいと願います。

●審査総評

応募された作品の総体は、①鉄道のシンボリックな車両そのものに焦点を置いたもの、②輸送機能としての駅空間における相貌、③路線環境(風景)と鉄道との調和、などの作画が大方で占められ、その季節感や時空間が十分表現されている。審査委員たちは、鉄道事業や映像分野に永年携わってきた方々ばかりで、言わばその道のプロである。寄せられた写真群は個々の著作者の想いが込められた自己表現であり、応募された全ての方々に賞を与えてあげたいのは、審査委員共通の思いである。一方、コンテストという位置付けでは、作品に甲乙を付けるという作業がどれだけ辛いものか、誰もが認識している。

審査委員は、寄せられた写真群を前に、審査規定をクリアし写真映像として優れた作品であることはもとより、応募者個々が一人の写真作家としてとらえ、著作権者自身が主催者に対してどのようなメッセージを送り、併せて個々の鉄道に対する眼差しや考え方、主催者の意図を十分汲み取り、審査する構えとしている。

応募者の性別構成比で見ると男性は88%で、40歳代~70歳代のウエイトが最も高く62%を占める一方、女性は12%で50歳代が最も多い。とりわけ、昨年同様シニア層の写真熱が非常に高いものが伺える一方、10歳代の応募者数は23%に上り、低年齢層の伸びが顕著となっている。デジタル化社会において、誰もが簡単に写真が撮れる時代。若年層は、SNS等、写真を撮る機会を備えていることから、着実に裾野の広がりが見える。しかし写真への親近感はあるとしても、それがコンテストに耐えられるかどうか、また敷居の高さがネックとなり、応募するまでに至らないという傾向があるのも事実である。鉄道愛好の世代をみると、必ずしもシニア層で占めている訳ではなく、低年齢層から高配まで年齢層を問わないのが鉄道愛好の魅力でもある。自らとらえた写真で留まっているものと、作品として創り上げるプロセスや責任がコンテストにおいては二極化していることも確かである。

一方で、当初は少なかった低年齢層と女性作家の進出が顕著に見えてきた。蓋を開けてみると、鉄道愛好家や写真愛好家という位置付けではなく、最近写真が面白くなってきたとか、鉄道に対する知識がなくとも、車両のフォルムが可愛いとか、女性の細やかな視点でとらえられている作品に好感が持てる。これまで、男所帯であった鉄道愛好の中で、女性が新たな視点と優しい眼差しで新風を吹き込んでくれていることは喜ばしい限りである。

このような、決して写真や鉄道愛好に対するキャリアではない、作者の感性や眼差し、写真の背景にあるメッセージ性が見え隠れするものがないと、第三者(審査委員)に対し伝わり難いものがある。また、裏書データは審査中のチェックはするものあくまで確認で、必ずしもタイトルやコメントが写真と一致していないことも多い。作者の想いはあるが写真はそうは言っていない、ということである。現場に立ち、被写体に相対した時、これまでイメージしていた作画や思いにどれだけ近づけられるのか、が鍵

となる。しかし、現実にはそうはいかないのもので、結果として写真になると見事に覆されることも多い。想像していたものとは別の観点でとらえられる偶然性の面白さ、逆に思い通りにならないのが写真の楽しさで、真の醍醐味がそこにある。

●第9回「鉄道の日」記念フォトコンテスト入賞作品

最優秀賞	「復興への祈り」	南 輝明
優秀賞	「雪夜」	河原塚 正太郎
//	「ゆりかもめの特等席!」	仲田 弘明
//	「思い出に手を振って」	三田村 裕
//	「おつかれさま」	古川 涼太

十文字義之審査委員長賞	「初めての長旅」	谷村 典之
竹内健蔵審査委員賞	「左を見つめて」	北河 尚馬
島由紀子審査委員賞	「もうおねえちゃんだもん」	臼井 優
原健人審査委員賞	「手と手」	山本 邦治
三村伸弥審査委員賞	「平和」	塚本 浩行
本江幸一審査委員賞	「手を振る運転士さん」	山田 晴之

フレート賞	「スーパーオイルエクスプレス」	阿部 勝男
テッピー賞	「かくれた♡を見つけたよ」	松井 歩
テッピーナ賞	「触れ合い」	早野 由香

(敬称略)



最優秀賞 「復興への祈り」

南 輝明さん

千葉県の上総中野から五井までをつなぐ小湊鐵道。養老溪谷を抱え路線環境の素晴らしいロケーションに、今回も同線を題材にした作品が多く寄せられた。裏腹に自然災害による被害で、路線が寸断されたこともあった。昨年9月の豪雨災害でも甚大な被害を受けている。路線の復旧を経た今年3月、沿線の復興を願おうとイベントが行われた。灯したランタンを夜空に放ち、その願いを託している。宙に舞うランタンと列車とのコントラストが素晴らしく、沿線住民の活力と起き上がる鉄道の底力を感じた。夜景という厳しい条件でランタンと列車がなぜ静止しているのか？ランタンは紐で繋がり、列車は一時停止している。国土強靱化への観点と沿線と事業者の底力が十分に伝わる作品だった。



優秀賞 「雪夜」

河原塚 正太郎さん

都内葛飾区立石の街に雪が降ってきた。雪景色で一変する街の相貌を京成線とともに良く表現している。津々と降る粉雪、轍と商店、街灯と踏切警報灯、すべてが雪夜の情景を構築し、ゆっくりとした時間が流れていく。凍える手にカメラを構えた河原塚さんの意欲と普段見ることのない静寂さをとらえた作品に、審査員一同が共感した。昭和ノスタルジー溢れる作画に、裏書データを見ると、作者の若さに驚いた。そんな年齢層を超えて共感できたことが何より嬉しい。周辺開発で変わり行くエリアを今後も見据えて欲しい。



優秀賞 「ゆりかもめの特等席!」

仲田 弘明さん

例年にも増し、連日猛暑に見舞われた今年の夏。公共交通の快適さが、如何に心地良かったことか。新交通の先頭にかぶりつき、都市景観とともに案内軌条の流れを追っていく。目に飛び込んで来るものすべてが新鮮で心が躍る。正にアトラクション的な感覚と、自ら運転している錯覚を感じ、ウォーターフロントへ誘うひと時を味わったに違いない。麦わら風サマーハットと朱のワンピース。季節感が良く分かり、夏の少女が表現された。すれ違いの列車と構成できたら、なお一層の臨場感が表現できたであろう。



優秀賞 「思い出に手を振って」

三田村 裕さん

鉄路には輸送機能だけではない要素がある。路線環境や車両の相貌で、その時代背景に戻れる魅力がある。三田村さんは、列車に手を振る犬の散歩中の女性に出会った。ロマンスカーの存在は、それぞれの旅情を運び、いくつもの思い出を残してくれた。引退を目前にVSEへの感謝と労をねぎらう気持ちが良く表現された。同氏も彼女の想いと共感できたのではないか。収穫を待つ色づく稲穂、背景の山々、犬も列車を見ている光景に路線環境が十分理解できる。



優秀賞 「おつかれさま」

古川 涼太さん

津々と降り続く雪で、機関区構内は白さを増してきた。副本線に重連で留置された内燃機関車にもキャブに積り、ヘッドライトを覆うほどだ。躍動する主要電気機関車とは裏腹に、機関区の傍らにじっと耐えている姿に対し、古川さんの労いの気持ちが良く分かる。モノトーンの色調も、機関車の重厚感と雪の情景を一層引き立たせ、朱の塗色がコントラストを奏でている。



十文字義之 審査委員長賞 「初めての長旅」

谷村 典之さん

奈良県から息子さんとともに関東の鉄道に来線した谷村さん。都心から離れた茨城の地で、高架線を行く夕暮れの鹿島臨海鉄道の車窓風景に何を感じたのか。ところ変われば路線環境も変わる。関西の鉄路と照らし合わせて、長旅の楽しさを十分満喫できたであろうか?この作品を見た時に、当方の幼少期とオーバーラップしてしまった。小学校1年生で初めて、一人で鉄道に乗り出かけたことを。谷村さんの眼差しは、息子さんの成長を再認識するとともに、この旅で共有できた鉄路の楽しさを見据えていた。機会あれば再び関東の鉄路を訪ね、その路線環境に浸って欲しい。



竹内健蔵 審査委員賞
「左を見つめて」

北河 尚馬さん

ゆっくりと隅田川を渡る東武鉄道伊勢崎線を背景に、欄干には羽根を休める海鳥の姿を強調した。左手には桜も写り込んでいる。花曇りの天候からまったりとした時が流れていく都心の情景が良く伝わっている。号令をかけたように列車と鳥の向きが同じで、北河さんは双方の位置関係を同じくしたことで、一層作画の楽しみが倍加した。都心の動植物と鉄道のコラボが、穏やかな春の訪れを感じる。



島由紀子 審査委員賞
「もうおねえちゃんだもん」

臼井 優さん

2歳半の姪をベビーカーに乗せ病院へ向かった。すると突然姪はホームで、ベビーカーを降りて押し進めたという。タイトルからも妹の誕生が理解でき、臼井さんは、その光景に日々刻々と変わる彼女の成長ぶりを痛感したに違いない。やること成すことすべてが初めての経験で、姉になった彼女の意欲と責任が背中を押している。臼井さんの見据える眼差しはさることながら、生活を支えるやさしい地域公共交通との共生が垣間見れた作品である。社会全体が支える安心・安全な輸送環境の姿がそこにある。



原健人 審査委員賞
「手と手」

山本 邦治さん

逆光のフレアの中に、利用者と車掌のコンタクトがあった。母親に抱かれて、小さく手を振る女兒。それに応える車掌の姿。長いレンズで引き寄せたことで、出発信号とともに車両も強調され、簡略化された作画も有効だった。山本さんは、超望遠の扱いも手慣れ、独自の画像を創り上げる力を備えていると思う。恥ずかしいのか眠いのか、母親の胸に顔を埋めた女兒の窺い知れない表情を色々想像してしまう。



三村伸弥 審査委員賞 「平和」

塚本 浩行さん

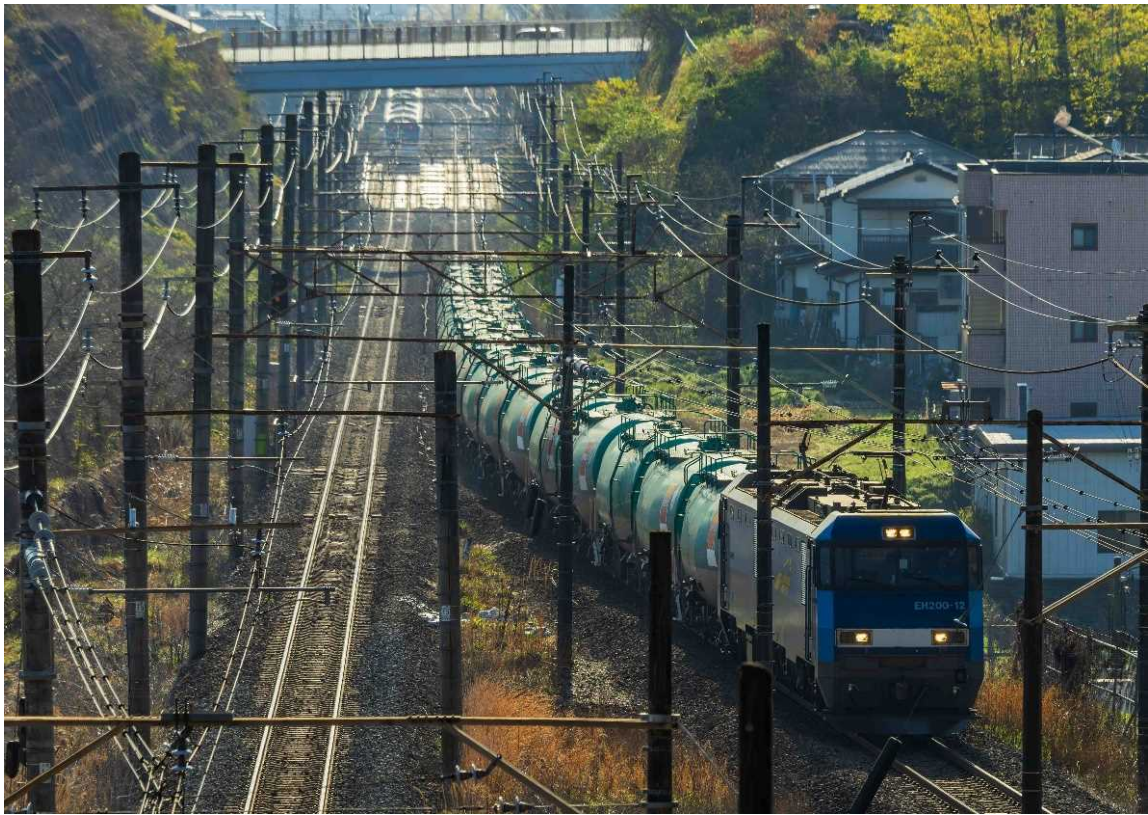
神奈川新町駅に程近い、笠程(かさのぎ)稲荷神社。穀物の神様として知られ、鎌倉時代末期に造られた阿弥陀如来を表した「板碑」は、市の有形文化財に指定される。塚本さんは沿線に出向き、この神社に足を止めた。神社の看板犬なのか、鳥居の袂で寝そべる柴犬。横を歩行者が通り、背景に京急線が駆け抜けていく。新緑の境内に奉納旗、車両の赤がアクセントとなり、絶妙なコントラストを奏でている。環境変化に動じない犬の安心感から、変わらぬ日常の安心感が十分感じ取れる。当たり前が如何に大切かということだ。



本江幸一 審査委員賞 「手を振る運転士さん」

山田 晴之さん

息子さんとともに、房総の鉄路へ出かけた。手を振ると応えてくれた運転者の計らいに地域鉄道の温かさ感じる。都心の鉄路とはまた違った路線環境の下、沿線の支えもさることながら、地域と共生する位置づけが明確化され理解できる。住民の欠かすことのできない重要な足は、地域とともに支え合って行かなくてはならない。山田さんの写真の背景に、鉄路の真の背景と課題が見え隠れしている。当たり前を止めないために。



フレート賞 「スーパーオイルエクスプレス」

阿部 勝男さん

産業と暮らしを支える物流の根幹を成す貨物鉄道。車扱貨物のメインカーゴが燃料輸送である。ブルーサンダーに牽かれ、中央線を流れていくタキ車の連帯。背景には旅客列車が見え隠れしている。逆光の条件下でもクリアし、貨物鉄道の力強さと底力が良く表現されている。左曲線を切りながら流れる列車、架線柱の間から顔を覗かせるタイミング、阿部さんの綿密さと、撮影に対する正しい姿勢が理解できる。タイトル表現も好感が持てた。



テッピー賞
「かくれた♡を見つけたよ」

松井 歩さん

この作品を見て、最初は何を撮っているのか理解できなかった。窓に写り込む自分たちの姿なのか?そのヒントは、ロングシートに隠れていた。審査員一同が微笑んだ。意表を突かれた若い感性と不思議な作画に脱帽である。背もたれのモケットが表す紋様を凝らして視ると、ハートに見えてくるから不思議だ。彼の観察力と優しい眼差しに共感した。親子で鉄道に乗り、写真を楽しむ。鉄路の魅力を共有しながら、写り込みから微笑ましさも十分理解できた。今後、この列車が隠れた「ラッキートレイン」の位置づけになるかも知れない。



テッピーナ賞 「触れ合い」

早野 由香さん

地方鉄道の魅力は、その時代にタイムスリップできる懐かしさを備えている。そのような、ゆっくりとした時の流れに身を任せ、小湊鐵道を活写している早野さん。車両や駅舎等の構造物、取り巻く環境すべてが鉄路を構築するスポットとなる。長めのレンズで車両をダイナミックに引き寄せ、通票片手に列車を送り出す駅長と車掌の触れ合いを強調。ほのぼのとした地域鉄道の良さが表現された。都心では有り得ないホームから生える菜の花、咲き誇る桜を背景に春の訪れが十分感じられる。